

熊野古道集中山行に支部から10名参加

日本山岳会 120 周年記念事業「全国山岳古道調査」の一環として、5月に熊野古道集中山行が行われた。全国各支部の会員がそれぞれ熊野古道の各ルートを歩いて、5月18日に熊野本宮大社の大斎原に集合する企画。北海道支部では、3名参加による大峯・南奥駈道縦走の支部山行を実施したほか、本部主催山行の中辺路・Bコースに4名、中辺路・Cコースに3名の会員が参加したので、それぞれの山行について報告してもらった。

女子3人で大峯・南奥駈道縦走

5月15日-18日 [古道]

大峯奥駈道は、紀伊半島の背骨・大峰山脈を吉野から熊野まで縦走する約100kmの路。山岳修験道の祖・役ノ行者が開いたとされ、深山幽谷に熊野信仰が息づく聖なる山域だ。全コース踏破には1週間近くかかる。私は過去に中央部と北部を歩いているが、熊野本宮まで歩く予定だった25年前の1回目には水場が枯れていて途中撤退を余儀なくされており、南奥駈道の最終部分だけ歩いていないのが心残りだった。そこへ今回の「熊野古道集中山行」の計画。これは歩き残した部分を踏破する絶好の機会と、支部山行として企画し、女性3名パーティで挑むこととなった。軽量化を重視し、好天、高めの気温が予想されたので、ツェルト&タープ泊とした。

当初は入山口の前鬼へ吉野からのアプローチを計画していたが、直前に国道が土砂崩れで不通となり、新宮からに変更。南奥駈道の無人小屋管理や登山道整備をされている「新宮山彦ぐるーぷ」代表の沖崎吉彦さんに、許可車しか入れない悪路の林道を車で稜線上の持経宿まで送っていただき、水場や幕場についても詳しく教えてもらい、大変助かった。お礼申し上げたい。(山崎邦子)

■ 5月15日

新宮 - 持経宿 - 転法輪岳 - 行仙宿

新宮駅前のホテルを沖崎さんの車で7:30 出発。霧雨の中、いつ崩れてもおかしくない池原林道を慎重に走り、



ガスって神秘的な景色もイイ

9:55 第22 靡・持経宿着。小屋の隣の不動堂で「般若心経」を読んで安全登山を祈願し、雨具を着て10:40に縦走スタート。「稜線の雰囲気がとても良い」と小屋にいた白装束の男性が言っていた通り、暫く緩やかな登降の樹林帯が続く。ヤマツツジやシャクナゲの花が霧の中に鮮やかに浮かび、幻想的で大峯らしい景色。11:50 第21 靡・平治宿に着き、大休止。南奥駈の小屋にはストーブまたは囲炉裏と薪が有って、どこも快適だ。

最初のピーク・転法輪岳への登りはルンゼの鎖場となり、12:40 山頂。下って倶利伽羅岳に登り返し、また下って急登で本日最後のピーク、第19 靡・行仙岳 15:30。

(2面に続く)

【目次】

- 2024年度北海道支部総会を開催 6
- 花パト自然保護研修会を開催 7
- 全国支部懇談会【神奈川】に参加 8
- 山行報告 9 -11
- 「山の天気ライブ授業」のご案内 13
- 今後の主な山行予定 16

南奥駈道は最高所が1,300mほどと全体に標高は低いものの、累積標高差は北部～中部エリアより大きいと言われているが、初日からそれを実感した。

行仙宿に16:00着。薪ストーブで衣類等を乾かす。この日が小屋で有り難かった。明日からは好天予報。強くなった雨音を心地よく聞きながら眠りに就く。(山崎邦子)

■5月16日

行仙宿 - 笠捨山 - 地蔵岳 - 香精山 - 古屋宿跡

行仙宿を6:30出発。風が強く雨具着用で杉林を進む。長い急登を頑張り、8:35第18靡・笠捨山に到着。雲海がきれいだった。激下りの後もアップダウンを繰り返す、本日の核心、地蔵岳へ。シャクナゲに励まされながら、次第に険しくなる山道を根っこ、ロープ、鎖を頼りに4本足でよじ登る。ヤセ尾根の箇所も多く、15kgの重荷に振られないよう慎重に進む。頂上直下に第17靡の槍ヶ岳。急斜面には白いイワカガミが群生。「ナンカイイワカガミ」という北海道にはない品種らしい。

10:20地蔵岳頂上。小さくかわいらしいお地蔵様が迎えてくれた。頂上の裏には立派なお地蔵様も鎮座。下りも垂直に近い崖？が連続し、鎖を頼りに足場を見極め慎重に下る。その後は杉林の緩やかなアップダウンが続く、11:30第16靡・四阿宿。第15靡・菊ヶ池、第14靡・拝返しと進み、12:23に第13靡・香精山に着く頃にはすっかり晴れ渡り、青空の下、幾重にも折り重なる



地蔵岳からの下り、約5mの鎖場



大峯奥駈道の奥の院、玉置神社

大峰山脈の連なりに山の奥深さを実感し感慨にひたる。

標高差500mを下り、第12靡・古屋宿跡の稜線より少し下がった林道の幕場に14:30着。沖崎さんに書いていただいた地図を頼りに150m下った「21世紀の森」近くの水場まで約1時間かけて往復し10ℓの水を汲み上げた。CLがツエルト、タープで快適な寝床を設営、明日の好天を期待させるオレンジ色に焼けた夕空を見ながらの夕食で本日の疲れを癒した。(三浦一恵)

■5月17日

古谷宿跡 - 玉置神社 - 大森山 - 五大尊岳 - 六道の辻

6:15に出発して標高差80mを登ると、やがて玉置神社に通じる車道と並行して進むようになる。杉木立の緩やかなトラバース道に朝の涼しい風が吹きぬけていく。

8:25花折塚で大休止。初めて玉置山の山頂が見える。途中の展望所からは前日に越えた笠捨山や地蔵岳が見え感動的だった。小ピークをいくつも越え9:55、標高1,076mの第10靡・玉置山に登頂。ここで出会った方に今山行初の三人勢揃いの写真を撮ってもらう。そこから階段状の急坂を下ったところが玉置神社。白い玉石がご神体の玉石社、御神木の杉や樹齢三千年の神代杉、社の威厳のある屋根・・・なんとも神秘的な境内だった。

昼食をとった玉置辻から先は、これまで付かず離れずしていた車道が遠のき、山奥深く入っていく。13:30大森山山頂着。標高差300mの登りは疲れた身体には厳しかった。きついアップダウンを繰り返す15:00第7靡・五大尊岳。ロープが延々と続く急坂を下り、玉置神社でもらった飲み水も残りわずかとなった16:30、六道の辻に到着した。ここは役ノ行者像が鎮座する第6靡・金剛多和ノ宿跡で、広くて穏やかな幕営適地だった。休む間もなく水場へ。10分下ると幅1mほどの長いナメ滝風の沢にぶつかり、1人約3ℓの水を汲む。

待ちに待った夕食の時間。役ノ行者像に見守られながらの宴会だ。玉置神社のお神酒と食担の三浦さんが作ったパスタは最高に美味しかった。我々だけしかない、とても静かな夜。月の明かりも届かないような真っ暗闇の深い森の中で眠りにつく。
(谷口美咲)

■5月18日

六道の辻 - 吹越峠 - 七越峰 - 熊野川渡渉 - 大斎原

いよいよ最終日。朝から真っ青な空が広がり、爽やかな風が吹く絶好の日和。6:15 出発。荷は軽くなり、今日は行程も短いので快調に歩く。いきなり急登で第5摩の大黒天神岳へ。下って車道と交差する山在峠には7:30に到着。実は沖崎さんより、当日通過する集中山行パーティのためにこの山在峠にて御接待をするので、よかったですらどうぞ、とお誘いをいただいていたのだが、その時間が9:00～ということなので時間が合わず、残念だがメモを置いて先に進む。

第4摩・吹越山～吹越峠は標識が無くて位置同定できず、知らない間に通過ぎていた。標高が下がり、樹の無い道は暑くなってきた。いきなり視界が開けたと思ったら「大斎原展望地」だった。9:10着。眼下に初めて大斎原の大鳥居が見えた。大峯奥駈道が初めての二人は歓声を上げる。

車道から公園の階段を登って最後のピーク・七越峰に9:30着。あとは熊野川河畔へ下るだけ！と思ったら、2



熊野川を渡渉してゴール



熊野古道各ルート

箇所ほど短いながらも結構急な登り返しがあり、なかなか河畔に付かない。全員ぐったり。10:35、やっと熊野川の渡渉点へ。「順峯(南から北上すること)起点」の標識があった。渡渉が怖いと躊躇する谷口さんを叱咤激励して全員で川に入る。「冷たくて気持ちいい〜」。流れの穏やかな部分を選んだが、膝上から股下くらいの水につき、全員ズボンがずぶ濡れ。河原で少し休むと日差しが強いので乾きは早かった。そのまま大斎原へと歩き、予定時間ぴったりの11:00ゴール!

集合時間まではまだ間があるので、タクシーで湯の峰温泉へ。4日間の汗と疲れを落とし、自分でふかす名物の温泉卵とお蕎麦で昼食を摂って、バスで熊野本宮大社に戻る。無事下山の参拝に本宮大社の石段を登っていくと他パーティの面々と出会い、互いに慰労。15:00に大斎原へ。全員で記念写真を撮り、チャーターバスにて勝浦温泉のホテル浦島へ向かった。
(山崎邦子)

【参加者の感想】

●装備、水問題など、かなりハードルの高い山行だったが、女子3人で励まし助け合いながら、古の修験道を4日間歩けたのは二人のお陰。熊野川を渡渉し、熊野本宮大社の大鳥居をくぐるフィナーレは大変感慨深いもので、参加出来て本当に良かったと思う。CLや新宮山彦ぐる一歩には感謝しかない。感激を忘れないうちに奥駈道の北部も歩いてみたい。
(三浦一恵)

●自分が最後まで無事に辿り着けたのはメンバーお二人の励ましのおかげ。大変感謝している。厳しい道のりだったけれど、今では辛ささえ良い思い出。
(谷口美咲)

●なかなか行くきっかけがつかめなかった、やり残しの南奥駈道。これで胸のつかえがとれました～私のワガママ企画にお付き合いをいただいたお二人に感謝です。
(山崎邦子)

○参加者 CL 山崎邦子、谷口美咲、三浦一恵

熊野古道集中山行 Bコース 中辺路 3日歩き

5月16日-18日【古道】

一鐵巖

私の熊野古道は、十数年前に小樽山岳会の先輩と小辺路に足を踏み入れたことに始まる。道外の山も縦走も初めてで、彼方に連なる大峯を仰ぎ見て、いつの日か歩きたいと思った。日本山岳会に入会して間もなく大峯奥駈道の募集があり参加。吉野から前鬼、前鬼から熊野本宮大社と、2年に分けて縦走し、これを契機に積極的に本部山行委員会山行に参加するようになった。熊野古道は通算5回になるが、中辺路はごく一部しか歩いていなかったの、今回の「熊野古道集中山行」では、Bコースの中辺路3日歩きに参加することにした。

5月15日 伊丹空港からJR天王寺駅を経て夕刻、紀伊田辺駅に到着すると、ホームで本部山行委員の清登さん、中坪さんとバッタリ。宿のチェックインもそこそこにお二人と北海道支部メンバーで街へ繰り出す。清登さんお薦めの店で頂いた地酒とモチガツオやひろめが絶品。

5月16日 7:00に宿で参加メンバーの顔合わせ。北海道支部4名のほか、本部山行委員3名、東九州支部2名、埼玉支部、福井支部各1名の11名がタクシーで滝尻王子へ。ここにある熊野古道館で多くの人が押印帳を購入し、支給された目印の八咫鳥の手拭いをザックに付けて、8:30に歩き始める。この日も含め三日間お天気が良かったが、気温は冷涼なので汗も苦にならない。

驚いたことに行き交う人の大半が外国人。ニセコのバックカントリーと一緒に。それにしても古の人はどのように、また何を求めてこの道を歩いたのか。計画より約一時間遅れるも全員が安全無事に和気藹々の山行を楽しんだ。16:50近露王子着。迎えの車で民宿まんまるに17:20着。ここで東京多摩支部、関西支部の各1名と合流。

民宿オーナーの運転と対応の荒さは前代未聞。客にも家族と思しき従業員にも終始怒鳴り散らす。客に最年長者の年齢を尋ね、同じ84歳ながら私の方が誕生日が



早いのが悔しいらしく、驚いたことに握力比べを挑んできた。地元牛のシャブシャブと特大瓶の焼酎は逸品であった。

5月17日 6:30に民宿を出て、昨日と同じ運転にまた肝を冷やす。近露王子を6:50発。草鞋峠の急な下り坂の先から蛇形地蔵まで約4.5km、2011年に台風被害を受けた急峻な山道を進む。15:00に発心門王子着。ホテルのバスで川湯温泉にあるホテル浦島系列の川湯山水館へ。河原プールで数人が外国人客と交歓。

5月18日 ホテルのバスで再び発心門王子へ。10:15に出発し13:40熊野本宮大社着。参拝後15:00に大斎原集合。記念撮影を行い、バスで紀伊勝浦。連絡船でホテル浦島に渡り、夕刻19時から懇親会に参加した。○北海道支部参加者 一鐵巖、助田梨枝子、銭亀三佐子、李曼葛

熊野古道集中山行 Cコース 中辺路 小雲取越え

5月18日【古道】

京極絃一

熊野古道集中山行の本部企画、Cコースの中辺路小雲取越え16kmに参加した。

5月18日 前泊した勝浦温泉「ホテル浦島」からスタート地点の小口自然の家へ貸切バスで向かう。国道は深い谷中の熊野川沿いを走るが、青々とした流れと白い河原が眩しく映え美しい。大雲取越を踏破して小口自然の家に泊まっていた十数人のメンバーと合流して9時に出発。

天気は快晴、深い谷の中で山の斜面は杉の木に埋め尽くされている。トンネルを抜けた先で国道と分かれて赤木川に架かる小口瀬橋を渡って熊野古道に入る。民家の脇や玄関前を抜け、石段の道は尾根へと上がっていく。一帯は杉の美しい林で鬱蒼とした中に古道は設けられていた。林の中なので直射日光が当たらず、快適に登っていきけるが、長い登りに高齢の二人は遅れ気味になる。清水さんに守られながらも最後尾になり、次第に離されていき、3人旅となる。杉林が切れて谷



の向うに緑濃い熊野の山々が見渡せた。エゾマツ林、トドマツ林を見慣れている私は、スツクリと立つ杉林や地面を覆う羊歯に、北海道との植生の違いを感じ、他人の庭に居ようだった。

うぐいすの鳴き声が響き、時々石段や歌碑が出てくる中、行き交う外国人とにこやかに挨拶を交わしながら登っていくと、苔むした石積が残る桜茶屋跡に出た。傍のあずまやで休んでいたオランダのペアからクッキーをごちそうになる。オランダのクッキーは美味いんだと自慢していたのがいじらしかった。相変わらず深い杉林の中をいくが、桜峠へ登り切ると、今度は下り坂となってホッとす。すれ違うパーティーが多くなるが、いずれも外国人ばかりで日本人は皆無。ここはどこのかと考えてしまう。石堂茶屋跡のベンチでは韓国の女性2人が弁当を広げていたので遠慮し、挨拶を交わしただけで通り過ぎる。



明るい杉林の中にうず高く小石が積まれ、その上に地蔵がある所に出る。熊野詣の道中で亡くなった人を弔うために建立された地蔵で、その前に積み上げられた石を賽の河原に例えたのか「賽の河原地蔵」と呼ばれている。やがて道は小雲取山を巻くようにいくので、寄り道とばかりに小雲取山頂へ。杉林の中のかすかな踏み跡を5分ほど辿ると、細い立木に山頂の小標識があった。標高450mだが、杉林に覆われ展望は無い。時間は12時。戻って先を急ぐ。

杉林の尾根をどんどん下ると鞍部となり、林道が交差する。少し下った所にトイレがあるが寄らずに進むと、杉林を通して下に見えるトイレ広場から賑やかな声が聞こえる。林道を渡って上りにかかる妙法山への分岐。すぐ先だが、諦めて通り過ぎる。

さらに鬱蒼とする古道を進むと、急に視界が開けて「百間ぐら」の展望地だった。太陽が眩しいが、多くの外国人が休み賑わっていた。足元から深く切れ落ちる谷の向うに熊野の山々が見渡せ、大展望である。ここは暑いので少し先に進んで杉木立の中で昼食とし



た。おにぎりを頬張りながら振り返ると、青いJAC記念Tシャツの人たちが見える。清水さんが戻って確認すると、なんと先行しているはずの私たちのパーティーだった。先ほどのトイレ広場で昼食休憩を取っていたのに、私たち3人は気がつかずに追い越してしまったというハプニングだった。

その後は一緒に万才峠、松畑茶屋跡を経て、長い下りの続く古道を歓談しながら辿った。最後は赤い花や草木に迎えられて民家の間の急な石段を下ると請川だった。熊野川の白い河原に迎えられる。到着は14時20分で、5時間半の歩行だった。

時間があるので熊野本宮大社に参拝。熊野古道集中山行に参加した各支部の人たちの姿も見うけられ、石段を下ってくる北海道支部のメンバーとの嬉しい出会いもあった。参拝後、集結地の大斎原まで歩いたが、気分は晴れやかであった。

○北海道支部参加者 京極紘一、坂上信之、清水義浩



山行を終えて大斎原旧社地に集合した支部メンバー

2024 年度 日本山岳会北海道支部総会を開催



2024 年度北海道支部総会が 6 月 1 日（土）14 時から、札幌の「かでの 2・7 北海道立道民活動センター」1070 会議室で開催されました。昨年まで 4 月に開催していた総会ですが、今年からは、議案書の作成などのために十分な準備期間を設け、開催時期を本部と同じ 6 月に変更しました。

今総会には会員 32 名が出席。委任状提出の会員 57 名と合わせて、6 月 1 日時点の在籍会員の過半数を超えたために総会は成立。議長に鈴木貞信会員を選出して議案の審議に入りました。

1 号議案は、2023 年度事業報告。支部山行や研修などの山行企画事業、一次救命処置講習会やガンバルゾム V 峰初登頂報告会に、高山植物盗掘防止パトロール等の自然保護活動などの支部公益事業、日本山岳会創立 120 周年記念事業の一環としての道内の古道調査研究事業、さらには会員増強の取り組みなどについて、支部長や担当役員が説明しました。

続いて会計担当から収支決算と会計監事による監査報告が行われました。

1 号から 3 号までの議案は一括で採決され、満場一致で承認されました。

続く 4 号議案は 2024 年度事業計画。支部山行、技術研修や、10 月開催予定の「山の天気ライブ授業」や自然保護活動、山岳 7 団体による空沼岳 - 札幌岳縦走路の登山道整備などの公益事業をはじめ、各種事業、行事等の計画、予定が事務局から提案されました。

5 号議案として新年度の予算の説明があった後、6 号議案の役員人事では、1 名の退会によって空席となっていた監査委員の候補として、須田康仁会員が提案されました。

その後の質疑応答では、神埜和之会員から、空沼岳 - 札幌岳縦走路の登山道整備について、危険が伴うので参加者には保険をかけて実施すべきとの意見が出されました。

また京極紘一会員、芳賀孝郎会員からは、近年、海外登山の計画がなく、調査研究の予算も計上されていないが、実施する考えはあるかとの質問。支部長は、まずは若い会員を増やして気運を盛り上げ、遠くない将来に取り組みたいとの意向を示しました。

4 号から 6 号までの議案についても一括で採決が行われ、満場一致で承認されました。

総会終了後、会場を札幌駅近くの居酒屋・大庄水産に移して 16 時から懇親会が開催され、会員同士の交流を深めました。

○総会出席者 荒田孝司、井田雅之、小野浩二、神埜和之、北川麻利子、京極紘一、黒川伸一、黒田忠、小玉孝之、小松理恵子、齊藤宣明、坂上信之、佐々木朋代、清水義浩、鈴木貞信、須田康仁、高橋健、竹内正明、田中健、谷口美咲、常本良一、中沢友佑、新井田幸子、芳賀淳子、芳賀孝郎、畠山迪子、樋口みな子、藤木俊三、藤原幸一、吉田郁子、和田マサコ、渡部雅寿

2024年度「花パト」自然保護研修会開催

藤理恵子

北海道からの委託で例年行っている支部の公益事業、大雪山国立公園高山植物盗掘防止パトロール（通称：花パト）。本年度も、45名の登録者で、6月1日～10月10日の期間で実施しております。その活動開始に先がけて5月23日、24名が参加して札幌エルプラザ環境研修室で自然保護研修会を開催しました。

研修会では、北海道環境生活部自然環境局自然環境課企画調整係の小野寺岳史郎技師からパトロール業務についての説明があった後、写真家の伊藤健次氏による「環オホーツク圏の旅～北海道の原風景を探して」と題した講演。北海道や極東ロシアなどの植物や野生動物の貴重な写真のスライドとともに、自然の素晴らしさや様々な要因による自然破壊の問題など、多岐に渡るテーマで語っていただきました。

特に印象深かったのは、30年前に北海道支部の会員らとともに訪れたカムチャツカの山の写真です。メンバーの若かりし姿が手つかずの自然の中に生き生きと映し出され、タイムマシンに乗ったような錯覚を覚えました。

また、最近の話題では、2年前の4月に発生した知床遊覧船沈没事故の影響によって、国や北海道などが携帯電話の通信エリアの拡大にむけて基地局の整備を進めていること（現在一部中断中）。あの素晴らしい知床岬の海岸線に大規模な太陽光発電のパネル設置が本当に必要なのか、非常に危機感を覚えました。

私たちは北海道の自然を当たり前のように享受してきましたが、意識をしないと知らぬ間に失われる宝物であることに気づかされるお話でした。

研修会後は講師を囲んでの懇親会。30年前のカムチャ



ツカに同行したメンバーもいて、話は尽きませんでした。

研修会を欠席した花パト登録者には、当日配布した資料を郵送しています。また、活動報告に使用するデータを花パト専用のメーリングリストでも送信しております。活動について不明な点がある場合は、下記までお問い合わせください。なお、メールにはすぐ返信出来ない場合もありますので、お急ぎの際はお電話ください。

○研修会参加者

荒田孝司、川辺マリ子、菊地宏治、黒川伸一、清水義浩、須田康仁、田中清子、田中健、谷口美咲、藤理恵子、中沢友佑、中田由美、橋本一郎、長谷川恵美子、樋口みな子、平松昌子、藤木俊三、藤田宗昭、山崎裕侍、吉田郁子、和田マサコ

〈会友〉大島聡子、鈴木エイ子、田中智子

【問い合わせ先】藤理恵子 携帯：090-8000-9726

E-mail：alpineplant@jac-hokkaido.com

白石ルームの清掃日は8月24日。ご協力をお願いします

白石ルーム1階の畳替えを、常本たたみ店を運営されていた常本良一会員が8月20日～23日に行ってくれることになりました。

そこで、これに合わせて8月24日にルーム清掃を実施します。室内清掃、庭の雑草刈り、植木剪定等の作業を午前9時から行う予定です。終了後は昼食・懇親会も開きます。多くの皆様の参加をお待ちしております。ご協力いただける方は下記までご連絡ください。

なお、8月20日、21日の作業も若干名にお手伝いいただけると助かります。下記までお問い合わせください。

白石ルーム 清掃日

【日時】8月24日 午前9時～

【場所】白石ルーム

【連絡先】荒田孝司 携帯電話：090-6699-7482

E-mail：ara_tonden@vesta.ocn.ne.jp

会員・会友の動向

■退会会員 鎌鹿 隆美 14032

第 37 回全国支部懇談会と岡野金次郎碑前祭に参加

田中健

5月25日、26日に神奈川支部主催で平塚市などで開催された第37回全国支部懇談会に参加しました。全国から約140人の会員が集まり、北海道支部からは藤木前支部長と私の2人でした。

25日、昼過ぎに「グランドホテル神奈中・平塚」に集まった参加者は貸切バスで順次、第1回岡野金次郎碑前祭が開かれる湘南平へ。ここは標高180mの高台にある、海と山の絶景が楽しめる公園。生憎雲が多く、富士山は見えませんでした。丹沢の大山や箱根の金時山、相模湾の江ノ島や伊豆大島は微かに望めました。

この公園の一角に岡野金次郎のレリーフの入った顕彰碑があり、碑前祭は15時から開催されました。岡野金次郎は日本山岳会初代会長・小島烏水の盟友で、1902年に二人で槍ヶ岳に登った後、当時横浜在住のウォルター・ウェストンに面会して日本山岳会設立のきっかけを作った人物。晩年を平塚に暮らし、没後間もない1961年にこの碑が建立されました。この碑前祭は、日本山岳会120周年記念事業「引き継ごう山岳祭」プロジェクトの一環として、今年初めて開催されたものです。

主催者の込田伸夫神奈川支部長、来賓の落合克宏平塚市長、橋本しをり日本山岳会会長によるあいさつに続き、関係者が顕彰碑に献花（写真①）。岡野金次郎の孫である岡野眞さんが祖父の思い出を語ったのち、神奈川支部会員の砂田定夫さん、小島烏水の曾孫の相良嘉洋さんが岡野金次郎の功績を紹介。彼がいなければ日本山岳会設立は何年も遅れていたであろうことを示唆しました。神奈川支部の高橋あかね会員によるフルート演奏も行われ、全員で記念撮影（写真②）。



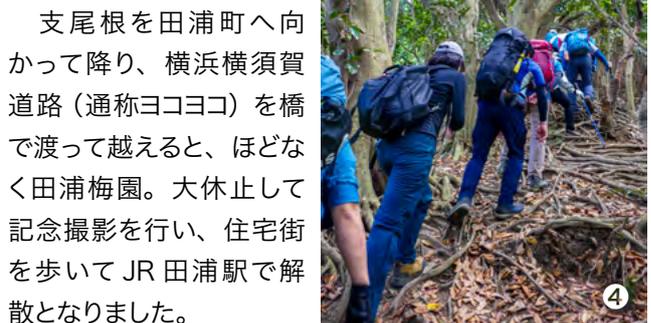
ホテルに戻って18時15分から夕食・懇親会。込田神奈川支部長、橋本会長のあいさつに続き、尾上昇元会長の発声による乾杯（写真③）で開宴し、会場は旧交を温めたり初対面で交流を深める会員同士の語らいの場となりました。来年の支部懇を主催する関西支部の小黒節郎事務局長のあいさつなどもあり21時にお開きとなりました。



26日の交流登山はAコース：三浦アルプス縦走とBコース：鎌倉大仏ハイキング。私は藤木さんとともにAコースに参加しました。神奈川支部会員のリーダーのもと班ごとにホテルをスタート。平塚駅からJR東海道線、横須賀線を乗り継いで逗子市へ。そこからバスで葉山町へ。トンネル脇からいきなりの急登を登って標高118mの仙元山まで登ると、背後には西の相模湾の絶景が広がります。残念ながら、今日も富士山は隠れていますが、江ノ島や葉山沖の菜島の鳥居や灯台、ヨットも見えます。

そこからは東へ、三浦半島の付け根近くを横断する形の稜線を縦走していきます。最初は標高200m足らずですが、稜線は細く、アップダウンも多く、かなりの急登もあって、登りごたえのある道です。眺望は効きませんが、緑豊か（写真④）。北海道では見かけない木や花ばかりで、飽きさせません。千手観音、馬頭観音のある観音塚（167m）で休憩し、大桜（159m）で昼食。送電線鉄塔の下を通過して本日の最高地点の211m標高点を過ぎると202mの乳頭山。由来不明の三角点があるここからは、今度は東の東京湾側の海が望めます。海上自衛隊の艦船や八景島、横浜のビル群も。

支尾根を田浦町へ向かって降り、横浜横須賀道路（通称ヨコヨコ）を橋で渡って越えると、ほどなく田浦梅園。大休止して記念撮影を行い、住宅街を歩いてJR田浦駅で解散となりました。



余市岳 - 余市川源流部から

5月4日 [山スキー]

今 芳文

残り少なくなってきた残雪を楽しむために、山スキーで札幌最高峰・余市岳に登ってきました。手稲・星置の24時間営業スーパー駐車場に8人が集合し、予定より早く前日に今期の営業を終了したキロロスキー場へ。

ここで1名と合流し8時半、山頂を目指してスキー場脇の余市川沿いの林道を歩き始めます。林道は何とか雪がつながっている状態。天気は晴れ渡り、通称イレブンセブン、プリン等のピークなど周りの景色を眺めながら1時間ほどでスキー場の余市第2リフト下に到着（写真①）。ゲレンデの雪は一部融けて地面が出ています。

ここから、対岸に渡るスノーブリッジを探しながら余市川右股の沢左股沿いに登って行きます。スキーを付けたまま渡れるほどの雪はどこにもなく、周辺を探索して何とか靴の中を濡らさずに渡渉できそうな場所を見つけ、全員で協力しながら左岸に渡ることができました（写真②）。

ここで少しタイムロスしましたが、源流域の疎林・灌木帯を登り、朝里岳から続く通称飛行場と余市岳のコル（1239㍎）へ。靴ズレれを起こしたメンバーの治療をしつつ、なんとか山頂への急登下のコルに着きました。

靴ズレのひどいメンバーとCLを残し、残りのメンバーで急登を登り（写真③）、山頂を目指します。日射で雪が緩み、スキーアイゼンを付けずに何とかここを登れまし



③



④



⑤



①



②

たが、ここからも長いのが余市岳。雪のある場所を選びながら進みましたが、ついに這松に阻まれます。仕方なく、夏道につながるルートを見つけ、スキーをデボして夏道を使って山頂に着きました。天気は最高で、羊蹄山をはじめ周囲の山並みを楽しめました（写真④）。

待っているメンバーがいるので急いでコルまで下り、そこからは、渡渉のない夏道沿いの下山も考えましたが、結局、ほぼ登りのルートに戻ることに。藪をよけて、少しでも滑りが楽しめるルートをとりました（写真⑤）。

余市第2リフト下まで行くと登り返しがきついたので、SL、CLの判断で、渡渉点からスキー場のコースに入り、途中からは水平の作業道をたどって、高度を落とさずにうまくリフト上まで行くことができました。そこからは、スキー場コースを快適に滑り降りてきましたが、ところどころ、スキー板2、3枚分しか雪が残っていないところもあり、ギリギリの滑走でした。全員登頂とはいきませんが、天気にも恵まれ良い山行になりました。

○参加者 CL 黒川伸一、SL 田中健、清瀬博昭、今芳文、齊藤宣明、峠原直実、山崎邦子、横山諒平、波多野あおい（JAC バックカントリークラブ）

暑寒別岳

5月5日 [山スキー]

横山諒平

大型連休の後半に、この冬豪雪だった増毛山地の山に登った。増毛町内のはまなす会館を拠点として、当初は5月5日に増毛天狗岳、6日に暑寒別岳と、2山に登る予定であった。しかし、6日は生憎の雨予報であることから、急遽5日に暑寒別岳に登ることになった。暑寒別岳は増毛山地の最高峰で、春スキーで人気の山だ。過去に2度敗退し、今年こそと思っていた私にはありがたい決定だった。

石狩市役所に6時半に集合し、登山口のある暑寒荘に9時頃到着。各自装備を整え、9時半頃に出発した。清々しい青空の下、皆で談笑しながら佐上台を目指す(写真①)。疎林内にはまだ雪が残っていたが、稜線に上がる途中で無くなり、スキーを担いで藪漕ぎをする。稜線は雪が残っており、ダケカンバの木に付けられた番号プレートを目印に標高を上げていく。

標高1076mの「ドーム」付近で、足の痛みを訴えるメンバーが出たため、無理せずに下山する組とピークを目指す組にパーティを再編した。扇風岩は登らずトラバースし、13時半に標高1220mに到達。標高差200mの大斜面を前に気合を入れなおし、一步一步刻むように登る。大斜面を登りきると雪がなくなり、ハイマツ帯となった。左手、東側を巻けばスキーで歩けたようだが、素直



に夏道に合流。スキー板をハイマツの根本にデポし、頂上台地を歩いて約20分、遂にピークに到達。3度目の挑戦にして初の頂上に、達成感でいっぱい(写真②)。今さん、桜井さん、精久さんと登頂の喜びを分かち合う。精久さんは上手にルートを取り、最後までスキーを利用したの登頂だった。

雄大な増毛山地の景色を堪能し、14時半頃下山開始。日本海が織り成す絶景に飛び込むようにスキーを走らせる(写真③)。佐上台までの約4kmをノンストップで滑る爽快感は格別で、山スキーの楽しさを実感する。佐上台からの下りは記憶に残るほどの大変な藪漕ぎで、今回の山行に彩りを添えた。

オーベルジュまじけで温泉に入って汗を流し、はまなす会館で夕食。先に下山したメンバーを中心に調理したバラちらしとモツ炒めを頂く。荒田さん差し入れのワラビも美味しく、春の訪れを感じる。増毛山道の会の小杉さんからは国稀の酒を二升差し入れていただき、増毛町の条例に則って皆で乾杯してありがたく頂いた(写真④)。

6日は井村さん案内で、巖島神社や元陣屋、国稀酒造、増毛山道別荘口を見学し、増毛の歴史の深さに触れる。最後に寿司のまつくらで昼食をいただき現地解散。美しい山と土地の歴史に触れた有意義な2日間となった。

○参加者 CL 黒川伸一、荒田孝司、今芳文、齊藤宣明、桜井則彦、佐々木朋代、佐藤精久、須田康仁、峠原直実、三浦一恵、山崎裕侍、横山諒平、波多野あをい (JAC バックカントリークラブ)

ピンネシリ - アポイ岳縦走

6月16日【登山道】

黒川伸一

日高山脈南西部、ピンネシリ（958㍍）からアポイ岳（811㍍）までをつなぐ縦走を6月16日に9人で行った。かつて「天空のお花畑」と呼ばれたアポイ岳だが、周辺の稜線では年々ハイマツの繁茂が旺盛になって、お花畑は縮小の一途をたどっており、今回はその実情を目の当たりにしたという印象を抱いた。

前日15日の夜はアポイ岳山麓のアポイ岳ファミリーキャンプ場でバーベキューを行い懇親の時間に充てた。現地泊の利点を最大限生かすべく、当日16日は午前3時に起床、午前4時30分にキャンプ場をスタートし、下山地のアポイ岳ジオパーク・ビジターセンター横登山者用駐車場に車2台を残置した後、2台の車で林道様似大泉線の通称「新富越え峠」（標高437㍍）まで移動、午前5時30分に登山口をスタートする。

整備された登山道を1時間ちょっと歩いて、標高750㍍を過ぎれば樹林が少なくなり、見晴らしの良い稜線散歩になる。樹木の生育を抑制するかんらん岩の影響は絶大だ。気持ちの良い稜線歩きが続くが、ふと雨具ズボンを見るとダニが数匹付着、他のメンバーも同様だ



た。時期的にダニの多いことは分かっていたが、少々驚く。時々、互いにダニチェックをしながら気持ちの良い稜線を歩いて（写真①）2時間でピンネシリ山頂。雪の影響で山頂標柱が消失した山頂周辺はガスに覆われていたので先を急いだ。

稜線上はハイマツ、樹林帯は背の低いササの繁茂が目立つが、ところどころに咲き誇る花を撮影しながら吉田岳（825㍍）へ。吉田岳周辺のかんらん岩帯はお花畑の名所とされてきたが、今年は積雪の少なさと気温の高さから例年より半月くらい花の開花が早まっていると聞いた通り、すでに開花ピークは過ぎているのか、花はチラホラという状況だった。

とはいえ、ピンネシリ～吉田岳～アポイ岳の稜線は、この低標高にもかかわらず樹林がほとんどなく、本州の高山に近い景観であり、太平洋や様似市街地が見下ろせて稜線散歩が実に楽しい。吉田岳～アポイ岳（写真②）を歩くころには晴天模様となり、出発から5時間でアポイ岳に到着した（写真③）。ここでようやく他の登山者に出会う。アポイ岳からはメジャールート馬の背～アポイ岳登山口を歩いたが、馬の背からは、歩いてきたピンネシリ、吉田岳、アポイ岳とその稜線が見渡せ（写真④）、感慨もひとしおだった。

○参加者 CL 佐藤正倫、SL 佐藤精久、黒川伸一、小玉孝之、齊藤宣明、鈴木由香、中田由美、平松昌子、小野聡子（黒川の友人）

2つの山小屋と登山道を整備、幌尻岳新冠ルートをメジャーに

6月下旬に日高山脈が国立公園に昇格したことにより、この山脈の最高峰にして唯一の2千^〇峰、日本百名山でもある幌尻岳（2052^〇）を目指す登山者がさらに増えることが予想される。日高山脈に惹かれて半世紀前に公務員の職を辞し、山麓の新冠川沿い、新冠町若園地区に移住。幌尻岳とイドンナップ岳周辺を長年歩き、2つの山小屋を避難小屋として確保して新冠側の登山道を維持、定番ルートに定着させた松本健さん（80）は「日高山脈は整備され尽くした本州の山とは全く違う。観光的なことを期待した入山者が増えると、遭難も起きやすくなるのが危惧される」と一抹の不安を指摘する。新冠ポロシリ山岳会（旧新冠山岳会）会長で、日本山岳会北海道支部会員として十数年、当支部の「自然児学校」（後の「子供サマーキャンプ」）で現地受け入れを担っていた松本さんと新冠川上流域の関り、国立公園化への思いを紹介したい。

*

幌尻岳には、額平川、千呂露川、新冠川の3ルートがある。20回以上の渡渉がある額平川ルート、北戸蔦別



幌尻岳山頂での松本夫妻（1990年7月）

岳、戸蔦別岳と1900^〇超の2座を越えなければならない千呂露川ルートは、ともに天候に左右されやすく、遭難が頻発してきたが、松本さんが関わってきた新冠川ルートは林道歩きが長いものの、天候には左右されず、山頂往復拠点となる新冠ポロシリ山荘、アプローチ拠点となるイドンナップ山荘があることで、安全確実に幌尻岳に登れるルートとして知られる。

日高山脈の麓に移住して 半世紀の松本健会員 日高山脈国立公園化への思いを語る

松本さんは北海道営林局（現北海道森林管理局）勤務時代に、木材資源調査で新冠川最上流、ナメワッカ岳周辺の沢筋で1週間、人跡未踏の森を歩いたことで日高山脈の魅力に取りつかれ、30歳で退職して1974年に妻子と新冠川沿いに移住。今年がちょうど50年の節目になる。知人の養鶏施設で勤務後、離農跡地に移住、時間を見つけては地元の農家らと幌尻岳周辺を歩いてきた。

そんな山主体の日々の中、幌尻岳南山麓の造材作業の「収穫調査小屋」が役目を終えたため幌尻岳登山の拠点になると考え、92年に新冠山岳会を設立し、新冠町の協力を得て、現在の新冠ポロシリ山荘となるこの建物の譲渡を受けた。また、下流にある電源開発作業施設も同様に、現在のイドンナップ山荘として登山用への使用に道を開いた。93年春には新冠富士、イドンナップ岳への登山道を開削。この年の7月に日本山岳会北海道支部



新冠町の自宅前で幌尻岳の方向を指さす松本健さんと恵津子夫人

が創立25周年記念に開催したイドンナップ岳登山会を地元で支え、それがその後の自然児学校開催につながった。

新冠山岳会は2015年に現在の新冠ポロシリ山岳会に衣替えし、メンバーも新冠以外に広がり、幌尻岳の新冠川ルートやイドンナップ岳登山道の整備、2つの山小屋の維持・管理に尽力している。幌尻岳、イドンナップ岳、新冠富士の山頂標識は同会が設置したものだ。幌尻岳の新冠川ルートは「歩く」ことにこだわったプロアドベンチャーレーサー田中陽希が歩いたことで17年、「幌尻岳新冠陽希コース」と命名、記念碑がルート起点となるイドンナップ山荘前に設置されている。

松本さんは「日高山脈の魅力は、手つかずに近い自然が今も身近にあって冒険的な登山ができる数少ない場所であること。こういう自然の中に身を置くことで感じるものは少なくない。トイレ問題など問題はいろいろ残るが、訪れる人にはそんなことを感じてもらえれば」と話している。

(黒川伸一)



幌尻岳登山の拠点となる新冠ポロシリ山荘



イドンナップ山荘（後方）と田中陽希プレート（左）

山岳気象予報士・猪熊隆之さん講師に 「山の天気ライブ授業」10月札幌開催

日本山岳会で山岳気象予報士・猪熊隆之さんを講師に定期開催している「山の天気ライブ授業」を10月に北海道でも支部公益事業として実施。座学の山岳気象セミナーと手稲山での観天望気フィールドワークを行います。

登山を行う上で、雲の動きなどから天気を予想する観天望気は大変重要なスキルです。公益事業なので外部からも参加者を募りますが、会員・会友の皆さんもぜひ参加して学んでいただきたいと思います。なお、フィールドワークのみの受講はできません。

【山の天気ライブ授業】

10月26日（土） ■山岳気象セミナー（座学講義）

会場：りんゆうホール

受付 13:00 セミナー 13:30～16:00

10月27日（日） ■フィールドワーク（観天望気）

会場：手稲山・サップロテイネススキー場コース

受付・手稲山ロープウェイ駅跡前 9:30

フィールドワーク 10:00～13:00

（登り1時間30分 - 山頂30分 - 下り1時間）



■講師プロフィール 猪熊隆之さん

山岳気象予報士。国内唯一の山岳気象専門会社「ヤマテン」代表取締役社長。国内330山の天気予報を行い、海外登山隊の山岳予報も手がける。中央大学山岳部前監督。国立登山研修所専門調査委員兼講師。著書多数。

●定員 山岳気象セミナー80人 フィールドワーク40人

●参加費・資料代500円（予定） ●申込締切8月31日

●参加申し込み先 黒川伸一

メール：sr-river@kf7.so-net.ne.jp 電話：090-9020-0425

※座学のみか、座学とフィールドワークかをお知らせ下さい。

さんてん 山巔の小さな岩場2題

京極 紘一



パゴダの塔

私は山巔（さんてん＝山のてっぺん）の小さな岩場や岩塔をクライミングして狭い頂に立つのが大好きだ。山巔ならではの高さがあり、ここでクライミングするのは、適度な高度感とワクワクするような緊張感が面白いのである。

大きな岩壁や岩稜は北海道にはそう多くないが、山巔の小さな岩場なら探せば結構ある。大雪山の山巔の岩場や岨山針峰登攀については拙著「素晴らしき幸運な登攀」に書いたが、それ以外にも恵庭岳頂上岩塔や銭函天狗山東面、手稲山、芦別岳頂上岩壁などがあり、そこをクライミングして無上の楽しみを味わってきたが、恵庭岳山頂の岩塔は崩れ落ちてしまい、素敵なルートが消滅してしまったのは残念である。

昨年私は傘寿（さんじゅ＝80歳）を迎え、その記念に4月に「傘＝かさ」にちなんで天塩岳近くの笠山（かさやま）に登ったが、山頂から周囲の山々を眺めつつ、今後は、残り残した山巔の岩場をゆっくり巡ろうと思いついた。その最初の山が駒ヶ岳の剣ヶ峯であった。

駒ヶ岳・剣ヶ峯一峰

これまで駒ヶ岳の剣ヶ峯のてっぺんに立ったことがないのが心残りだった。この山には高校時代に登ったが馬の背までで、岩場である剣ヶ峯は当時の私には無理だった。隣の砂原岳に登り、そこから眺めただけで下った。それ以来、駒ヶ岳を訪れることは何故かなかった。このことを佐藤精久会員に話すと、昨年（2023年）5月に一緒につき合ってくれて、剣ヶ峯に登ることができた。剣ヶ峯一峰の10㍍位の岩塔だったが、山巔の小さな岩場をクリアできた喜びは大きく、長年心にわだかまっていた懸案が解決できたのは嬉しかった。

5月13日 新緑に萌える中山峠を越え、精久さんのイン



①

ドヒマラヤ遠征の話聞きながら、波穏やかな噴火湾沿いのドライブも楽しく、秀麗な駒ヶ岳の姿を仰いで東大沼キャンプ場に泊まった。

5月14日 赤井川コースを辿る。道の両側に展開する落葉松林は霧に包まれ、薄緑の葉は瑞々しく輝いている。霧の中を登っていくにつれて霧は薄くなり、1時間も登ると雲の上に出て、青空が広がる中に駒ヶ岳が馬のような姿で見えてきた。左の頭に当たる所が剣ヶ峯で、岩塔がそそり立っていて心がはやる（写真①）。

馬の背から火山礫の尾根を辿って岩場の基部に出た（写真②）。左の岩稜へ続く緩いスラブを登るが、フィックスロープがあって邪魔だ。岩稜から目の前の岩塔へ。左から回り込んで岩を登るが、ここにも固定ロープ。岩塔に上がると「剣ヶ峯四峰」の小標板。ギャップの先に親指を立てたような岩塔があり、ここより高い。一旦降って四峰を回り込み、岩稜を辿って近づくと「親指岩塔」の正面は切り立っていて手強そう。少し下から左の岩場を回り込み、階段状の岩を登って北側に出ると「剣ヶ峯一峰」の標識があった。

親指岩塔は、ここから10㍍位の高さで立ち上がっている。垂直の壁はスラブでロープが必要だ。20mロープでアンザイレン。精久さんには悪かったが、トップを譲ってもらい、ギャップを跨いで右手の幅広のクラックに取り付く。下はすっぱりと切れ落ちていて高度感がある。微妙なクライムで上に抜けると、草付きのレッジに出た。そこからは壁の中を左へ上昇するバンドを難なく辿り、剥がれそうな岩の突起の右を登るとリッジに出た。小さなハイマツに古い捨て縄が掛かっていた。

リッジに上がらず右側を直上すると一峰の頭だった。あっけない。狭い頂にハーケンとボルトが打たれ、数本のシュリングがあった。そこに私のを加えて自己ピレーを取る。周辺の山々を見渡ししながら、山巔の岩場を登ったという最高の気分を存分に味わう。てっぺんでスックリと立ち上がりたかったが、頂は狭くてバランスを保てず、膝をついたままでポーズを取ったのは無様だった。ラッペルで肩に戻ると岩稜を北へ降りる。火口原から剣ヶ峯を見上げて歩くと、登り終えた充実感に溢れ、足取りも軽かった。



②

札幌岳・パゴダの塔

初夏の駒ヶ岳剣ヶ峯登攀に気を良くし、秋には「パゴダの塔」に出かけた。札幌岳の豊滝コースを辿ると盤の沢の対岸尾根上に見える岩塔で、その形状から最近ではこの名前で呼ばれている。この登攀の話は昨秋、佐藤精久さん、会友の益田敏彦さんと歓談する中から出てきたもので、私がパゴダの塔の頭に立ちたいと話すと、それでは直ぐにとり、晩秋の11月に出了かけたものである。

11月3日 晩秋のこの日は、雨は止んだが上空にはゴォーと強風が吹き荒れていた。西尾根を辿って岩塔の基部に達したものの、風は最高潮に達し、クライミング途中に強風でバランスを崩す危険があるため、中止して下り、残念な山となってしまった。

その宿題を解決するため今春再度3人で出かけた。

5月2日 パゴダの塔の北西尾根の藪尾根を登って前衛の西瘤が上がると、黒々とした岩峰が東に聳えているのが見える。周りを取り囲む針葉樹が少々邪魔だ。細い尾根を辿って基部に辿り着くも西面は垂直のスラブで手強そうなので東へ。針葉樹林の中の南面は急斜面で、東に回り込んだ所の大きな岩のテラスで登攀の準備をする。

見上げると、垂直の岩壁が針葉樹を突き抜けるようにそそり立ち、青空の中に灰色に浮かび上がっている。ハーネスやギアを装着し、クライミングシューズを履き、基部に上昇する草付きバンドを右に進むとリッジの端に出た。その先はすっぱりと切れ落ちている。ここから見上げると比較的緩いスラブの壁が展開しており、中程に小さな松の木



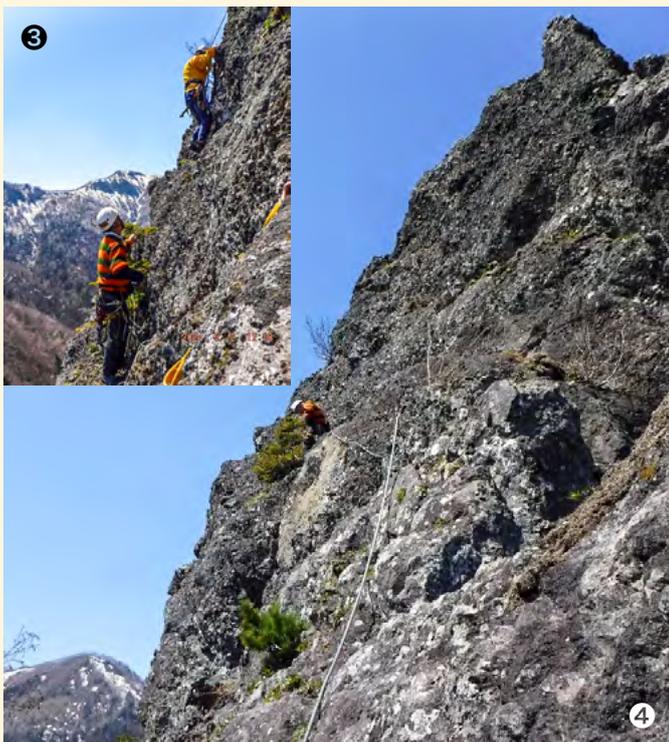
があるテラスがあり、その先は垂直に立ちはだかって頂へと続いている。

ここで50mロープを取り出しアンザイレン。ハイマツに自己ビレーを取り精久さんを送り出す。2mほどの垂壁を上がると、浮き石はあるものの岩はしっかりしていると興奮気味に伝えてくる。ギャップを越え、もう一段登るとバンドを左へ伝って松の木テラスに達した**(写真④)**。10mほどだが、その先が長いようなのでピッチを切ってもらおう。

続いて私。なるほど岩は太陽の日を浴びて暖かく快適で、クライミングシューズもヒットして愉快になる。松の木テラスに着くと、すぐ精久さんを送り出す。精久さんは左のリッジにルートを取って登っていくが、残雪を光らせた札幌岳をバックにクライミングする姿は絵になる。さらに小灌木にアンカーを取って抜けていくとリッジは緩くなり、10mほどで岩塔の頭に出た。精久さんは頭の岩にシュリングを巻き付けビレーに入った。今度は益田さんの番だ。取り付けからそのまま頭まで登ってもらい、精久さんは一旦松の木テラスへ下降、代わって私が益田さんの確保を得て登るが、彼らが登ったリッジを行かずに右側のフェイスをダイレクトに登った。岩壁は小さな石がポツポツと突き出たようにあり、それがホールドやスタンスになって登りやすい。垂壁を登る股の下から松の木テラスで確保している精久さんの姿が見えて高度感があり、高所を登っているという気分をちょっぴり味わう。一気に登って頭に立つが、山頂は両側が切れ落ちており狭い。細長い岩に股がって確保している益田さんの姿は、札幌岳を背にして映える**(写真⑤)**。北には盤の沢山があり、その向う遠くに札幌の市街が広がっていた。**(③は下降時の写真)**

私は念願の狭き岩の上に立ち上がってポーズを取ろうとするも、体がふらついて大空間の中に立つことは叶わなかった。岩に股がったまま両手を広げてポーズを取り写真を取ってもらい、課題というか夢を果たした。

さあ、次は何処の山頂の小さな岩場に行こうか？ 夢は果てしなく続く。



2024年内の主な山行予定

*日程や行き先は変更になる場合があります

- 7月6日(土) ●大雪山・銀泉台-赤岳-小泉岳〈花パト合同パトロール〉【登山道】 L: 藤木 前泊未定
- 7月6日(土) ●沢登り研修&キャンプ・登別川 - オロフレ峠 または 裏沢 - 室蘭岳【沢登り】 黒川
 ~ 7日(日) 壮瞥町・森と木の里センターのバンガロー泊 & バーベキュー
- 7月13日(土) ●東北・北海道地区集会(裏磐梯)参加者で東北の山登山【登山道】 L: 藤木・黒川他
 ~ 15日(月・祝) *西吾妻山、一切経山、磐梯山
- 7月20日(土) ●留知暑寒別沢 - 雄冬山【沢登り】 L: 佐藤精・黒川
 ~ 21日(日) テント泊
- 7月28日(日) ●ポン三ノ沢 - 野塚岳【沢登り】 L: 黒川 浦河町・オロマップキャンプ場前泊
- 8月3日(土) ●パンケニワナイ川 - 斜里岳 +α【沢登り】 L: 田中
 ~ 5日(月) キャンプ場コテージまたはテント泊
- 8月上旬 ●東大北海道演習林 - 大麓山(富良野市麓郷)【軽登山/スケッチ】 L: 荒田 宿泊未定
- 8月11日(日) ●カムイエクウチカウシ山【登山道・沢】 L: 山内
 ~ 12日(月・祝) テント泊
- 8月17日(土) ●オプタテシケ山 または 美瑛岳【登山道】 L: 藤木 *18日~19日に変更の可能性あり
 ~ 18日(日) 小屋またはテント泊 *美瑛富士避難小屋携帯トイレブース点検清掃活動に合わせて実施
- 9月7日(土) ●小田西川 - 狩場山【沢登り】 L: 田中
 ~ 8日(日) 沢中テント泊
- 9月17日(火) ●大雪山・愛山溪温泉 - 松仙園〈お月見山行〉【登山道】 L: 藤木
 ~ 18日(水) 愛山溪ヒュッテ(自炊)泊 *中秋の名月と紅葉と芋煮を楽しむ山行
- 9月21日(土) ●剣山/久山岳/芽室岳【登山道】 L: 黒川
 ~ 23日(月・祝) オートキャンプ場コニファーのコテージ泊
- 10月13日(日) ●キノコを楽しむ山行【登山道/キノコ採取】 L: 山崎邦
 ~ 14日(月・祝) 山域・宿泊未定
- 10月19日(土) ●元山 - 笹山 - 八幡岳〈低山縦走〉【登山道】 L: 黒川
 ~ 20日(日) 江差町で民泊
- 11月30日(土) ●上ホロカメットク山〈冰雪訓練〉【アイゼン・ピッケル】 L: 後藤・齋藤(申込先=黒川)
 ~ 12月1日(日) 白銀荘泊
- 12月20日(土) ●十勝岳連峰・カミフエリア〈山スキー合宿〉【山スキー】 L: 黒川
 ~ 21日(日) 白銀荘または上富山荘泊

*随時山行を企画します。その都度 ML や本紙などでお知らせします。

*実施日の1~2週間前までに、各リーダーなど下記連絡先までお申し込みください。

- 【申込先】 黒川伸一 E-mail: sr-river@kf7.so-net.ne.jp 携帯: 090-9020-4025
 藤木俊三 E-mail: momonga1001@jcom.zaq.ne.jp 携帯: 090-1642-2725
 山崎邦子 E-mail: mt-kuni-piko@kcf.biglobe.ne.jp 携帯: 080-5598-6036
 佐藤精久 E-mail: satouyoshihisajp@yahoo.co.jp 携帯: 090-5074-1440
 田中 健 E-mail: kenn0819@icloud.com 携帯: 090-4225-2786
 荒田孝司 E-mail: ara_tonden@vesta.ocn.ne.jp 携帯: 090-6699-7482
 山内 忠 E-mail: ezoyama@gmail.com 携帯: 080-1896-6766